

明治 25 年，虎列刺(コレラ)の解説記事

薬学雑誌 1892 年度(明治 25 年)，p 1150-1154

明治に怖れられた伝染病としてペストとコレラが思い浮かぶが、両者はかなり違う。ペストは、6 世紀のローマ、ユスチニアヌスの疫病や、14 世紀の黒死病はじめ、常に文明社会とともにあり、pestilence、plague という単語から分かるように、疫病の代名詞ともなった。ところが日本では 1899 年に初めて入って以来、最終患者の出た 1926 年までわずか 2,420 人しか死亡していない。島国であることに加え、患者が出れば徹底してネズミを駆除したというのが大きいだろう。

一方、コレラは意外と新しい。ガンジス川デルタの風土病だったものが、世界的疫病になったのは、19 世紀になってからだ。1854 年にはイギリスのスノウが、コレラの犯人として、瘴気ではなく飲み水を指摘した。それでもコレラは、患者の下痢便からどんどんうつってゆく。明治の日本は、2、3 年間隔で数万人単位の患者が出て、1879 年と 1886 年には死者が 10 万人を超えた。コッホによるコレラ菌発見は

1884 年である。

明治 25 年 11 月号の薬誌は、各国のコレラ事情を紹介している。それによると、この 1892 年は 9 月までにロシアで 16 万人、欧州ではハンブルクの 7,000 人を含む 4 万人が死亡したらしい。アメリカは「コレラバチルス」の汚染が心配ということでチーズや甘草などの生薬の輸入を禁止した。

ワクチンの研究も始まっている。1885 年のスペインの研究は失敗したが、本記事でも加熱(40.5 度 3 日間または 70 度 2 時間)した菌が動物を免疫したという報告を紹介している。

さらに、過去の「奇なる虎列刺療法」という記述もある。1832 年の世界流行のとき、米国の医師は患者の肛門にコルクを栓し、英国の医師は 1 分間に 80~100 回のシーソーをさせたという。笑うなかれ。真相は不明だが、これらは肛門を閉め、米のとぎ汁のような下痢を防ごうとしたのではあるまいか。コレラは脱水が直接の死因である。抗生物質を与えなくとも水分補給がかなり有効で、1970 年代に開発された経口水分補給療法(ただの水、糖、塩)は、発展途上国での患者死亡率を 50% から 1% 以下に変えた。

小林 力